

## 最優秀賞

### 「未来を創る：32歳の主張」

東海工業専門学校金山校 土木工学科 1年  
鷺見知彦

私は大学卒業後、自動車製造関連企業に10年間勤め、生産部門や輸送部門を経験させて頂き、役職や部下もいる中でとても充実した日々を送ってまいりました。

しかし、実家が建設業を営み、父も高齢化し、親族が集まる場では誰が家業を継ぐのかで毎回論争になり、私が長男と言う事もあり、強い身内の風当たりになり、32歳で土木1年生になる決意をしました。

そこで、他業種で10年間勉強させて頂いた目線で、(あまり若者ではありませんが)土木の未来への課題について考えさせて頂きたいと思います。

#### ◆若者が現場から消えた◆

高齢化の波は、建設業にもきているようで、建設産業で働いている労働者の約32%が55歳以上であるのに対し、29歳以下は約12%に留まっているようです。

また、建設業の労働は専門的な技能が求められることが多数です。しかし、その技能を持った労働者(建設技能労働者)は年々減少しており、特に平成17年から大工は48%、土木工は44%減少しています。

今では労働者の3人に1人が55歳以上との統計が出ています。

業績の面を見て行きますと、建設業は、一般的な製造業と比べて景気の影響を受けづらく、長く続く不況でも売上高に大きな変化は見られません。

それでは、なぜ若者が建設業の現場から消えてしまったのでしょうか？

いわゆる、昔から建設業の3Kと呼ばれる(きつい・危険・きたない)だけが若者から敬遠される理由だけではないと感じます。

以前私が、生産部門の現場管理を行っていた時は、建設業から流れて来たOBを多く(期間従業員として)受け入れ、一緒に仕事をしていましたが、そのOBに(家業を継ぐか)建設業に心が揺れ動いていると相談したところ、皆が口を揃えて、

『最近の低賃金の建設業ならコンビニのバイトの方がよっぽどマシ』

『建設業に行くより自動車産業に残った方が安全だし、理不尽な事も無いし、給料も良いし絶対に良い』  
と言われ、どれだけ建設業が嫌われ、敬遠されているのを感じ取れました。

次に、輸送部門に所属していた時に、建設業と同じく、輸送業も運転手の高齢化と若者の業界離れに

よる人手不足という深刻な問題に直面していました。

客先様の車の生産台数が増え、部品の物流量が増え、それに対応する為に増便しようとしても、車両はあっても運転手がない、運転手を募集しても、面接に来るのは定年間近の大先輩か日本語が得意でない海外出身の方、さすがに乗務して頂く訳にはいかず、既存の運転手に残業協定ギリギリまで働いて頂き、何とか首の皮1枚で繁忙期を乗り切った苦い経験がありました。

その経験を基に、私なりの若者の建設業離れ対策を申し上げますと。

根本的に労働環境+賃金+教育体制に問題を抱えたまま、表層のイメージアップだけを図ったところで、現役の建設業従事者やOBが『建設業は止めた方が良い』と言ったら、若者は一向に現場に集まらないと思います、また、集まったとしても耐え切れず直ぐに辞めてしまうと思います、抜本的な改善として。

- ①安全性の確保と向上
- ②労働環境の改善
- ③カンコツ作業の教育及び作業手順の文章化(マニュアルを作成し初心者でもある程度出来る様にする)
- ④賃金の向上(業界全体で賃金改革)
- ⑤完全週休二日制の推進
- ⑥機械化・自動化を進め労働者の負担低減

を推し進め、まず建設業の従事者が、自分の子供に『建設業は良いぞ!!』と胸を張って言える様にする事こそ、現場に若者が戻って来る唯一の方法だと思います。

私は幼少期、祖父に連れられて、実家が施工していた工事現場を周るのが大好きでした。

大きな重機で山を切り開いて道路を作ったり、近くに橋が無く大きく迂回していた不便な川に橋を通したり、民家裏の危険な急傾斜に防護壁を作ったりして、人々の暮らしが便利&安全になって行く姿を見てきました。

建設業=ダイナミックで人々の暮らしを豊かにする、最高にかっこイイ職業だと考えております。その思いもあり、建設OBの反対を押し切り、建設業界にやってきました。今後、自分の子供に『建設業は良いぞ!!』と胸を張り言える未来を夢見て、建設業界が改善していける様、私自身も尽力していきたいと思っています。